

佐世男と一緒に寄稿したことがあるが、この雑誌は左翼的傾向が強かったので、当局に睨まれ、短期間で廃刊となった。そのときの事情は詳しくは知らないが、後で聞いたところによると学校から圧力がかかって発行できなくなり、岡田と木下が後始末をしたらしい。

そんなこともあったが、我々の時分の美校は自由な空気に包まれていて毎日が愉快だった。八ッちゃん〔サトウハチロー〕が美校へ来ていたのもその頃で、番頭格の後藤俊春その他数名の取り巻きがいて、美校生がみな普通の服を着ているのに彼らは美の字の入った金ピカのボタンを付けた詰め襟の学生服を着て白いカラーをちゃんと付けていた。それが彫刻科の陽の当たるところにたむろしていて、通る生徒に声を掛けたりしている。八ッちゃんは私を捕えて、「おい、お前、おとつあんが偉いからって威張るなよ」とか何とか言うのだ。今でも可笑しくて仕方がないのは、ある晩、八ッちゃんや小野佐世男・後藤俊春、私を含む七、八人が向島の有名な待合で遊んだあと、さて勘定の段になってみな金がない。八ッちゃんなんかもとより金など持っていない。そこでゴッちゃん〔後藤俊春〕を人質に残してみな帰ってしまった。二日ばかりたち、思い出して行ってみると、ゴッちゃんはあの鼻の下に髭を生やした長い顔で泣き出した。こらしめのために布団部屋をあてがわれ、雑巾がけをさせられていたのだった。

私のクラスには三井の御曹司あり、松平子爵の息子あり、左翼学生たちあり、デカダン派あり、支那、朝鮮人留学生たちありで、実に多彩だった。「ドモ又の死」を一緒にやった松平四郎君は後に一歩兵卒として勇壮に戦い、猛烈な戦死を遂げた。私は詩曲部隊（西

條八十・飯田信夫・古関祐司・深井史郎・佐伯孝夫・服部良一・鈴木聡）の一員として上海附近を行進する途中、このことを聞いて涙が流れた。クラスの留学生たちは大体が金持ちで、あの劇をやったとき飲みものなどを差し入れしたのは台湾人生徒たちだった。支那人の許達には、やはり詩曲部隊に加わって上海へ行ったとき、ガールズデンブリッジのそばでバツタリ出会ったことがある。こちらの馬車に向うから来た馬車とすれ違ったとき、「コンちゃん」と呼びかけられた。驚いてよく見るとそれは真っ白い詰め襟のような支那の高官が着る服を着た彼だった。大喜びでかじりついてきて、直ぐに自宅へ連れて行ってもてなしてくれ、また、上海滞在中は色々と便宜を図ってくれた。しかし、美校時代の友人たちも今は殆ど世を去った。

⑭ 靖国神社の釣灯籠の製作

昭和五年三月十日、陸軍記念日二十五年記念として、天皇陛下から靖国神社に釣灯籠一对を下賜されることとなり、宮内省より本校に製作が依頼された。藤田勝重著「御下賜、御寄進の拝殿内釣灯籠について」〔やすくに〕昭和四十九年一月一日発行）によれば、約六カ月の間、製作にあたり、翌年三月十日に点灯された。左記は製作主任清水南山の製作談である。

本號巻頭所掲〔写真は略す〕の釣燈籠は、昭和五年三月十日陸軍二十五年記念祭に際し、畏くも 天皇陛下より靖國神社へ御燈籠御寄贈仰出され、宮内省より其製作に關し東京美術學校へ依頼

あり、舊蠟〔蠟〕漸く埃成して納入を了り既に靖國神社に御下賜ありて近く其拜殿内に懸けらる可きものゝ影象なり。始め依囑の事あるや學校長の命を承けて渡邊「香涯」教授は圖稿三四を作りて之を提出し内二種の撰定を得たり。一は陛下の御獻燈、他は皇族御一統より御寄贈のものなり。此二定稿により更に實作現寸圖を作成す。前者は四角型にして清涼殿型と春日型とを折衷案配せるものにて後者は六角形春日型なり。靖國神社の拜殿は間口十二間奥行七間に渉る廣大なる建物なれば、懸燈も亦大なるを要す。則ち四角型の方は底面一側の長一尺六寸檐先の一側の長さ三尺〇七分總高三尺九寸、神前の懸燈としては先づ大なるものなる可し。六角型の方は稍小くはあれど尙六角底面の徑一尺五寸檐先の徑二尺八寸五分高二尺三寸五分、決して小さきものにはあらず。

製作は小生之を擔任し鍛金分科研究生八田辰之助、寺田龍雄、秋田頼一郎、彫金分科研究生相川久、鴨政雄、山脇洋二、以上六名を督して六月初旬業を始め懸命の精進と晝夜の努力とを以て半歳を踰へ無事其業を卒へたり。

材料は全部黒味銅にて特に製銅所に囑して之に調製せしむ。主體に於ては其厚さ一分より薄きも七厘を下らず。鍛金製作としては決して容易の事にあらざるなり。重量は四角型のもの一個約二十七貫六角型のもの一個約十三貫なり。尙製作法に關し特異の點を擧れば御紋章は全部之を打出彫として水銀渡金〔鍍〕を施すこと七回、屋根柱火袋等の各部分は多くは蠟附又は振鋏を以て構成せられ、獨り六角型燈籠の屋根のみ鍛金術を以て作られたるものなり。ともあれ陛下並に皇族御一統より神への永久の御あかし、

其製作を奉仕せし一同の感激眞に淺からざるものあるなり。

(『東京美術學校校友會月報』第二十九卷第七号)

⑮ 无型の活動とその影響

昭和五年に工芸の革新をめざす无型同人が第一回地方巡回講演を行なった。『无型』24号(昭和五年十一月十八日)には次のように記録されている。

高村、廣川、杉田、豊田、山崎、松田、稲場の七人で北陸都市に巡回講演を試み、空前の大成功を収めた。

七月廿一日富山市。商業會議所。

七月廿三日高岡市。商品陳列所貴賓室。

七月廿四日金澤市。兼六館。

七月廿七日福井縣下、武生、遠敷、小濱、河和田各地方の工芸指導。

講演題目は次のやうなものであった。

- 都會の商店から見た地方の工藝 稲場 勝邦
- 外人は漆藝を何と見るか 松田 權六
- 工藝を語る 豊田 勝秋
- 現代工藝の基調 杉田 禾堂
- 漆藝の現在と將來 山崎覺太郎
- 工藝圖案の庶民性 廣川松五郎
- 作品批評 同
- 工藝の地方色と現代性 高村 豊周